『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

人生と宗教（仏教）について

高木英明

はじめに

入学されてから二週間あまりが経過していかがですか。少しずつ慣れてきたところだと思いますが、むかし私が学生の頃には「五月病」という状態になる人達がいました。「五月病」というのは、大学に入ってから一カ月ばかり経った五月頃になると、何となく何もする気にならないような状態になることを言っていました。なぜそうなるのかと言えば、ある場合には田舎の遠い所から都会に出てきて友達もあまりできず、

ホームシックにかかり、両親の所へ帰りたいと思うようになるとか、あるいは今までの高校とは全く違う大学という新しい環境の中に入って、なかなか適応できず、何となく精神状態がおかしくなるという場合もあったと思います。あるいは、受験勉強で高校時代にずいぶんしんどい思いをしたり、大学に入ることだけのために一生懸命勉強して頑張ったりした人が、大学ではかなり自由な状況の中に置かれるので何をしていいか分からない状態になり、いわば虚脱感に襲われたりする場合もあります。

そこで、いま申し上げたいことは、間もなく五月が来るので、「五月病」にかからないように注意して下さいということです。では、そうするためにはどうしたらいいのかということですが、それはしっかりと大学生活の目的・目標を見定めることです。大学に入ったのですから、四大の人はこれから四年間、短大の人はこれから二年間をかけて在学中に何をするのかという目的とか目標をはっきり自覚して欲しいと思います。それは人によっていろいろと違うと思いますが、どんな目的、どんな目標でもいいですから、この四年間に、あるいはこの二年間に是非これだけはやりたいと思うこと、あるいは是非身につけたいことを考えて欲しいと思います。中には、そういう目

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

的とか、目標が分からないという人もいると思います。どうしていいか分からないというのは困るので、そういう人は自分がなぜ生きているのか、人生とは何か、自分がこの世の中に生まれて今まで生きてきて、これからどのように生きていったらいいのかということをいろいろと考えてみて欲しいと思います。

このことは、『光華広報』という四月一日に発行された大学の広報の一ページに「新入生に贈る言葉」として書いておきました。これからお話することはそれとほぼ同じようなことになりますが、私の考えていることを少しお話したいと思います。

一　人生観

最近の若い人、あなた方はどうか知りませんが、むかし私が若い頃は、一〇代の後半から二〇代の前半にかけての青年期になると、「人はなぜ生まれて、なぜ生きているのか」ということについて深刻に考える人が少なくなかったと思います。私も、大学の二～三年の頃に「自分は何のために生まれ、なぜ生きているのか。あるいは、何

のために生きているのか」また、もっと一般化して「人はどうして生きているのか」ということを深刻に考えたことがあります。

最近ではもうほとんど話題にならないので知らない人が多いと思いますが、むかし戦前の高等学校の学生で「人生は不可解なり」と言って、日光にある「華厳ノ滝」に跳び込んで自殺した人がいます。戦前の高等学校は今の高等学校とは違います。今はみんな大学になっているのですが、その人は第一高等学校（今は東京大学の一部になっている）の学生でした。その人が滝に跳び込む前に近くにあった立木を削って書き残した言葉の一部が「人生は不可解なり」というもので、「人がなぜ、何のために生きているのか」を一生懸命考えても、それは「解くことができない、結局は分からない」というものでした。私も、人は何のために生きているのか、なぜ生きているのかということを一生懸命考え、他の人や友達にも聞きましたが、やはり答は分かりませんでした。見つかりませんでした。

そこで、どうして分からないのか、どうして解くことができないのかを更につきつめて考えていくと、それは私たち人間が「相対の世界」に住んでいるからではないか

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

ということになります。神とか仏とか、私たちを越えた存在（超越の世界）、あるいは「絶対の世界」の意思を想定しなければ、解決することができないのだということにたどり着くことになります。私たちは何のために、どこに向って生きているのかは自分では分からないけれども、私たちを越えた絶対の力（神または仏）によって生かされていると考えることはできます。

でも、神から与えられた目的や意味はあるのかもしれませんが、通常の場合、なかなかそれを理解することはできません。私たち凡人には分かりません。それは神様や仏様が存在していると信じることのできる人には分かるのだと思います。そういう人は、神様や仏様が私たちを生かして下さっていると理解することができる、あるいは信じることができる人達なのだと思います。

このような話をすると、神様なんかいないのでは、あるいは仏様とは死んだ人達のことなのではないかと思う人が多いと思います。神様が実際にいると思う人は手を挙げて下さい……?。では、神様なんかいないと思う人は手を挙げて下さい……?。どちらにもほとんど手が上がりませんから、手を挙げにくいのだろうと思いますが、神

様をどう考えるか、どう捉えるかによっても答は違ってくると思います。私たちと同じように物体として、物として、あるいは手で触ったり、見たりすることのできるものとして神様や仏様が存在しているかと問われれば、私はそんな神様や仏様は存在しないと答えるでしょう。でも、こういうことはありませんか。自分で一生懸命頑張っても、自分の力ではどうしようもない時、「神様・仏様何とかして下さい」と何ものかにすがる気持ちになる人は少なくないのではないですか。受験勉強を一生懸命したけれども、これ以上とてもできない、でもどうか大学に入れますようにと言って神様にお願いする気持ちになった人、あるいは神社にお参りして絵馬を書いた人も少なくないのではないでしょうか。それはやはり神様がおられると考えるからです。神様が全く存在しないのであれば、お願いしても意味がないということになりませんか。つまり、私達はそれぞれの置かれた立場で一生懸命生きているのですが、いろいろな条件の中で不幸になったり、交通事故に遭ったり、早く死んだりすることがあって、それらは人の力ではどうすることもできないのです。私自身について考えてみても、間もなく私は満六六歳になります。これまで約六五年間ずうっと生きてきたことになり

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

ます。入学式の時にも申しましたが、私は皆さんの三倍以上も生きています。でも、これまで通ってきた道は結果であって、私がねらってその通り生きてきた道ではありません。私が光華女子大学に再就職したというのも、私の意思だけによるものではありません。結果的にそうなっただけです。私がこの大学の学長になって、こんなところでお話をするということは考えてもみなかったことです。でも、結果的にこうなったということです。これは偶然にそうなっているのかもしれませんが、神様や仏様のお導きかもしれません。それを神様や仏様のおかげだというから分からないという人が多く出てくるのですが、少なくとも私たちの人間の力を越えた力が何か作用しているのではないかと思いますね。それを私は自分では「宇宙の力」と呼んでいますが、それは目にも見えないし、肌で感じることもできないのです。では、目に見えなかったり、音が聞こえなかったり、肌で感じることができなければ、何も存在していないと考えるべきなのかどうかということです。

私たちには実際に感じることのできない物がいっぱいあります。例えば、私達は空気の存在は知っていますが、空気がここに存在していることを見ることもできないし、

感じることもできません。でも空気は確かに存在しているのです。また、宇宙の彼方から放射線みたいな目に見えない宇宙線がどんどん地球に飛んできて、体の中にも飛び込んでいるのですが、私達には見ることができません。そういう物が昔は人間の力では確認することができませんでした。しかし、次第に科学が発達して、その存在を知ることができるようになりました。私たちの声も遠くでは聞くことができませんが、マイクでしゃべると、広いところでかなり多くの人が聞くことができます。また、マイクでは屋外にいる人までは聞こえませんが、空気の中を伝わっている音声を電気で捕まえて電波で送ると、ラジオやテレビで聞くことができますね。昔は目に見えなかったり、肌で感じられなかったりしたもの、存在しているとは思われなかったものも、実際には存在しているということが次第に分かってきたことになります。これは科学の進歩のおかげです。

神様や仏様は目で見ることも、聞くことも、肌で感じることもできないものです。入学式の時にも申しましたが、私自身は仏教や浄土真宗の信者でも信徒でもありませんから、というよりもこれまではむしろ不信心な方でしたから、そういう神様とか仏

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

様の存在をなかなか自覚できないと思います。しかし、私たちの力を越えた、そういうものが存在していて、それを感じることのできる人、神様や仏様が存在していると信じることのできる人がこの世の中には沢山いるということも確かです。そういう信仰を持っている人達、信者になっている人達は神様や仏様の存在を信じているのだと思います。偉大な宗教家、皆さんが一番よく聞いたことのある人は、仏教の釈迦（釈尊）、キリスト教のキリスト、もっと後の回教のマホメットなどで、世界の三大宗教と言われる宗教を開いた人達ですね。また、後にも神や仏の存在に目覚めた人、仏教で悟りを開いた人が次々に出ています。そこで仏教にもいろいろな宗派ができています。ちなみに、ここの光華女子学園を創られた人達は浄土真宗とか真宗と言われる宗派の人達であったことから、この学園は仏教系の、その中でも真宗系の学園だということになっています。悟りを開いてそういう宗派を起こす人達は非常に立派な偉い人達（例えば、わが国では天台宗の最澄、真言宗の空海、浄土宗の法然、真宗の親鸞、日蓮宗の日蓮、その他）だと思いますが、その人達は、何らかの形で仏の存在を実感することのできた人達ではないかと思います。そういう悟りを開いた人達の教えを

ずうっと引き継いで仏教はここまで栄えてきたということになりますが、キリスト教であれ、仏教であれ、回教であれ、それを信仰しなさいと言われても、すぐにはなかなか信仰することができないのが普通です。

私たち凡人はなかなか神や仏を実際に見たり、感じたりすることができませんから、簡単には信じることができないのですが、しかし神や仏を信じることができなくても、皆さんがこれからどのように生きていくのか、大学にいる二年間または四年間だけではなく、これから一生の間、寿命がある限り、何を目標にして生きて行くのかということは考えておかなければいけないことですし、それぞれの人がそれぞれの生き方を考えることはできると思いますね。

二　私の人生の意味づけ

そこで、最初にお話しましたように、皆さんはこれからの二年間、あるいは四年間の大学生活を有意義に過ごすために、自分は何のために、何を目標にして生きて行く

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

べきかについて考えてみたらどうでしょうかということですが、では貴方はどうなのかということになると思いますので、少し私の考えていることをお話します。

先ほど、私は「人がなぜ、何のために生きているのか」という問いに対する正確な答を見つけることができなかったと申しましたが、人が何のために生きているのかは分からないのだけれども、自分は自分の人生、自分の生き方を自分なりに考えて自分なりに生きて行くべきではないかと考えたことがあります。それをこれからお話します。

私は人間です。あなたがたも人間です。この私達人間は、人間以外の動物や植物、そのほかその元になっている原始生物、あるいは元の生命から次第に進化してここまで発達してきました。それはもうものすごく長い、何十万年、何百万年、あるいは何億年という長い年月をかけて、生命あるいは生物はここまで進化してきたのです。かつて中学校や高校でも「生物」の時間に習ったことでしょうが、それは長い長い歴史をかけた生命あるいは生物のたゆまざる営みの結果です。そこには実に長い生命の歴史があり、人類の歴史があります。私たちは、そういう生命の長い歴史の流れの中に

参加しているのだと考えることができます。その長い歴史の中では、私たちが参加する時間はほんの僅かな期間です。私についてみればこれまで僅か六五年あまり参加しているだけです。でも、そのごく短い期間ではあっても、私は生命の長い歴史の流れの中に参加していると考えることができます。

そして、このせっかく与えられた機会を生かして、私は私なりにベストを尽して、全力を挙げてよりよく生きるべきではないか、それが務めではないかと考えることができます。私を含めて、皆さんもそうですが、一人ひとりの人がベストを尽して生きる努力をすると、そういう力が集まって生命の歴史の流れをさらに続けていくことができるし、人間をより一層進化した存在にしていくことができるのではないかと考えるわけです。でも、皆さんが一番関心を持つのは、「霊界」だとか、「ノストラダムスの予言」だとか、あるいは「間もなく地球は滅びるのではないか」といった話ではないかと思いますが、この世の中で変らないものは何もないのです。これは仏教、お釈迦様の教えでもあると思うのですが、この世の中は「諸行無常」といって、この世に存在しているものは全て変っていくのです。地球でも太陽でも、いつまでも今のまま

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

で続くわけはないのです。「ノストラダムスの予言」が当たるかどうかは知りませんが、地球はいつか他の星と衝突するかもしれません。そこで地球はなくなるかもしれません。本当に予言が当たるか否かは別として、いずれ地球は滅びるかもしれません。あるいは地球がなくならなくても、人類や他の生命も滅びる時が来るかもしれません。それはずっと先にならなければ分からないのですが、そういう危ない時に、それを乗り越えていくだけの力を私たちは持たなければなりません。その危ない時が来た際に私たち人間がそれを乗り越えていくだけの力を身につけようとすれば、一人ひとりが自分の持って生まれてきている能力を最大限に生かす努力をしなければいけないのではないかと考えることはできます。だから、私たちはベストを尽して生きるべきだということになりますが、もちろん私たちには能力のある人もない人もいて、いろいろであります。同じことをしても早くできる人もあれば、なかなかできない人もいます。それは皆一人ひとりが個性を持って生まれてきているからですが、人はそれぞれの個性に応じて、持って生まれた能力に応じて、それに合わせて、あるいはそういう中で最大限の努力をして、ベストを尽して生きるべきであると考えることはできます。一

人ひとりがそういうふうに努力してこそ、それらの力が結集され、人類はやがて危機を乗り越えていくであろうと考えることができます。これはいわば楽天主義だと思いますが、悲観的に考えると、もうどうせ駄目だと言ってそこで生きる努力を止めてしまうことになります。それでは長い歴史を通してここまで進化してきた生命、「いのち」の流れを止めることになります。それは「もったいない」ことであるとは思いませんか。

自然界の植物などをじっと観察してみると、生きるためにすごい工夫をしていると思います。例えば、虫媒花と言われる花は、花の奥から甘い蜜を出して虫（あるいは鳥）を誘い、蜜を吸いに来た虫の体（あるいは鳥の嘴）に花粉をくっつけ、それを他の花のめしべまで運ばせて受精させ、種を作って子孫を繁栄させています。これはそういう植物が自分で考えた結果なのでしょうか。偶然みつけてそうしたのでしょうか。いずれにしても植物は実に不思議な工夫をしています（花粉をくっつけるために「てこ」を利用している花まであるのには驚かされます）。そのほかにも自然界には実に不思議なことがいっぱいあります。それは植物でさえ、あるいは動物でさえ、一生懸

命生きようとして頑張って、その結果ここまで進化してきたのだと思います。その生きようとする力はどこから出てくるのでしょうか。それは神や仏の仕業ではないのでしょうか。「いのち」は私達人間だけが持っているのではなくて、動物も植物も、ずっと昔の原生動物も、すべて繋がっているのです。それが「いのち」（以下、命）であり、生命なのです。だから命は大切にしなければなりません。「人はみな命の大樹の枝葉なり」という徳川家康または大岡昇平の言葉に私は魅せられます。

人の命を大切にしなければならないということはもちろんですが、人の命だけではなくて、ほかの動物や植物の命も大切にしなければいけないと思います。でも、自殺をする人がいますね。また、最近は、よく人を殺す人がいます。しかも、残酷な、残忍なやり方をして、平気で人を殺している人がいます。実際に人を殺す時に平気であったかどうかは分かりませんが、平気だからこそ人を殺すことができるのだろうと思います。また、世界を動かしている大きな国の大統領や総理大臣が戦争をしています。その人たちが直接やっているわけではありませんが、軍隊に命令をしてやらせています。今はアメリカが先頭に立ってナトー（ＮＡＴＯ）軍がユーゴースラヴィア（ボス

ニア・ヘルチェゴビナ）を爆撃しています。それによって多くの人を殺しています。ヨーロッパ、あるいは欧米にはキリスト教の人たちが多くいて、博愛とか、人を愛せよとか、人の命を大事にせよとかのキリストの教えを信じているはずの人たち（軍人）が、爆弾を投下して人を殺しています。なぜ戦争をするのでしょうか。人の命とか、生物の命などの仕組みやその意味を考えたら、人を殺したり、戦争をしたりすることはできないはずです。それにもかかわらず、そういうふうにならざるをえないのは、なぜなのでしょうか。それは私たち人間が「相対の世界」に生きている、矛盾に満ちた存在だからだと思います。

相対とか、絶対という言葉は難しくて分からないと思いますので、このことについて少しお話をします。入学式の時に短大の人と四大の人に話した内容は少し違っていましたから、この話はたぶん四大の方で話したと思うのですが、「相対」というのは何かに対応して、あるいは何かに比べてどうこうだということです。きれいな花があれば、それよりきれいでない花もあるし、あるいはもっときれいな花もあります。強い犬がいれば、それよりもっと強い犬もいるし、もっと弱い犬もいます。こういうふ

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

うに、何かに比べてきれいだとか、何かに比べて強いとかという世界に私たちは生きているのです。先程「ベストを尽して生きなさい」あるいは「生きるべきだ」と言いましたが、私たちがどんなにベストを尽して頑張っても、それには限界があって、もっともっとそれより上があるのです。オリンピックでスポーツ選手が一生懸命頑張ってほかの選手より強くなり、よりいい記録を出しても、それも相対的なものだから、その新記録もしばらくするとまた変えられていきます。このように私たちは何かに比べてよりきれいだとか、より強いとか、よりいいとかと考えていますし、そういった相対的な世界に生きています。もうこれ以上のものはないというのは、それは絶対の世界です。その絶対の世界は、先程申しましたように、神様や仏様の世界であり、私たちはそれに触ったり、それを目で見たり、あるいはその声を聴いたりすることはできません。だからどんなに頑張って、人間がどんなに進化しても、人間はそのままでは神様や仏様にはなれないと思います。キリストとかお釈迦様とかマホメットとかは、そういう神様や仏様の絶対の世界を感じた人ではないかと思います。お釈迦様のことを「仏陀」と言いますが、仏陀というのは、梵語という、お釈迦様の住んでおられた

地方の言葉であり、覚めたとか、目覚めたという意味です。覚めたとか、目覚めたというのは、そういう目に見えない仏様の世界を感じた、あるいた理解できたということだと思いますが、そういうふうになれるのは簡単なことではないので、私たちはどうしてもこの矛盾した相対の世界に生き続けなければならないのです。命は大事だとか、人の命も、動物の命も、植物の命も大事であり、命は大事にしなければならないということは分かっているのですが、それを徹底して考えていくと、私たちは生きていくことができなくなります。私たちは他の動物や植物を食べないと生きていけないからです。お釈迦様は、人間に近い存在である動物はできるだけ食べないように教えられたと思います。だから純粋の仏教徒の人たちは「菜食主義者」です。でも、動物は食べないにしても、植物は食べざるを得ないのです。そこに矛盾、あるいは限界が生じますから、命を大事にと言っても、それは「できるだけ」そういう殺生をしないようにするということ、命を無駄につぶさないようにするということになります。この「できるだけ」というのは相対的ということであり、何かに比べてということであります。

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

戦争反対、人殺し反対、あるいは他の動物や植物の命も大事にすると言っても、完全にそれを全うすることはなかなかできないのです。それは私たちが相対の世界で、きつい言葉で言えば「生存競争」をしながら生きているからです。そういう生存競争の結果が、人殺しになったり、戦争になったりしているということです。これはもう「宿命」のようなものではないかと思います。あるいは人間の「業（ゴウ）」と言ってもいいですが、そういう中で私たちはできるだけ無駄な殺生はしないように生きなければいけないだろうと思います。だから、食卓にのぼってきた動物や植物を食べる時は、その犠牲になる動物や植物のことを考えてみる必要があります。私たちは、あたり前のように、野菜を食べたり、鶏・豚・牛などの肉を食べていますが、それはほかの命を犠牲にしているということです。「贖罪（ショクザイ）」という言葉がありますが、私たちは食事をする時はそういう他の生命を犠牲にしていることに気づき、申し訳ないという気持ちで、「贖罪」の意味を込めて、あるいは「感謝」の気持ちを込めて食べなければならないのではないかと思います。私たちが生きていくためにはそういう他の生命を犠牲にせざるをえないのですが、そのように犠牲になる生命のためにも私たちは一生懸命

生きていかなければならないのではないでしょうか。

命を犠牲にしながら命を大事にすべきであるという矛盾を越えていこうとすれば、それはもう「絶対の世界」を考えるしかありません。絶対の世界というのは、仏の世界であったり、神の世界であったりするわけです。信仰ができる人、神様や仏様を信じることができる人は、それによって私達がこの世の中で抱えている矛盾とか、苦しみとか、悩みとかを和らげているのだろうと思います。私は、あるいは皆さんの多くも多分そうであろうと思いますが、神様や仏様をすぐには信じることができません。でも、この矛盾した世界の中で自分なりに一生懸命生きていて、悩みや苦しみがある状況の中で、自分ではどうしようもない時に「神様助けて下さい」という気持ちになるのは、もう暗黙のうちに神様が存在していることを前提にしているからです。

しかし、真宗という宗派では、「助けて下さい」とか、「何々をして下さい」と言ってお祈りをするのではないと言われます。それは仏様に「助けて下さい」というのではなくて、仏様に向って「感謝」をしているというのです。私たちが生きていること、他者によって生かされていることに感謝しているということです。私たちは、この世

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

の中を包み込んでいる仏様の手に抱かれて生きているというふうに考えると、「安らぎ」を感じませんか。実際にそういう仏様の存在が分からなくても、先程から言っていますように、絶対の世界、つまり私たちの住んでいる相対の世界を越えた「超越の世界」はあるはずです。神様とか仏様とかというと、はるか彼方に、宇宙の彼方におられるのではないかと思いがちです。宇宙の彼方にという表現があることから、宇宙はずうっと向こうの方に存在していると思いますし、キリスト教では「天にまします我らの父は……」と言って、神様が天高く存在しているように言っていますから、神様というのは遠い世界に住んでおられる存在だと考えがちです。でも、少し考えてもらうと分かるのですが、太陽も地球もそのほかの星も広い宇宙の中に浮かんでいるのです。宇宙には太陽のような星が無数にあります。はるか目に見えない彼方にもあります。宇宙に限りがあるのかどうか。皆さんは宇宙に「果て」があると思いますか。私は宇宙の「果て」はないと思っています。科学が進歩して、宇宙のことも次第に解明されてきており、宇宙はものすごいスピードで膨張しているのだと科学者たちは言っていますが、宇宙が広がり続けているのであれば、その宇宙が広がっている向こう

にもまだ空間があるはずです。空間がなければ広がりようがないからです。つまり、宇宙に限りはないのです。無限なのです。というふうに考えることができますし、またそういう宇宙も、私たちの住んでいるこの地球も、宇宙の一部なのです。私たちは宇宙の中に浮かんで生活し、生きているのです。もし神様が存在しているとすれば、神様は宇宙の彼方ではなく、ここにおられるのです。仏様もここにおられるのです。

「仏性」という言葉があります。その「仏性は全てのものに宿る」と言われます。私たちも仏様の性質を持っていますし、「絶対の世界」というのは私たちを全部包み込んでいる世界だと思います。そういう絶対の世界の神様や仏様に私たちは生かされているというふうに考えれば、心は安らかになってきます。そこで「感謝」の気持ちが出てくるし、「合掌」という形で自然に手が合わせられるということです。

このように人の生き方とか、人生とか、命とかをじっと考えていると、宇宙につながったり、あるいは宗教につながったり、ということになってきます。しかし、これは私の考え方なので、本当の宗教、あるいは宇宙の科学的な意味は必ずしも当たっていないかもしれませんが、私はこれまでこのように考えてきました。

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

次に、宗教あるいは仏教（特に真宗）のことについて少し考えてみたいと思いますが、これも私が学長になると決まってから「にわか勉強」で仕入れた知識ですから、正確に、あるいは十分に理解しているものではありません。そこで、いま理解できている範囲でお話します。

三　「法輪」の意味

先ずこの壇の上の仏殿に飾ってあるレリーフについて、前学長の阿部先生の「講話資料」に書いてあることを参考にしながら、説明します。

中央の銀色の円形のところには「南無阿弥陀仏」という六文字が書いてあります。これは親鸞聖人の御真筆（「六字の名号」＝東本願寺所蔵）から写したものだそうです。私たちは「南無阿弥陀仏」と聞けば、普通は、亡くなった人とか、葬式とか、法事とかを連想して、それは亡くなった人達のためのものかなあと思いますね。したがって、私もこれまで「南無阿弥陀仏」の意味を考えたことは全くありませんでした。

この最初の「南無」は、「帰依します」とか「信じます」とか「信心します」とかの意味を持つ接頭語で、これ自体には深い意味はないと思いますが、その下の「阿弥陀仏」は仏様のひとつです。その「阿弥陀」という言葉は梵語のAmitāyusとAmitābhaから来ています。これを漢字に直したもの、昔仏教がインドから中国に伝わった時に、あるいは中国からインドに修業に行った偉いお坊さんが中国に帰って、中国語に翻訳した時に、それらの梵語に当てた漢字が「阿弥陀」であったということです。

また別の文献によれば、阿は無、弥陀は量、したがって「阿弥陀」は「無量・無限」を意味します。量というのは、水でも、液体でも、壺などに入って一定の量（かさ）を持つではありませんか。そこで「量がない」というのは、それがずうっと拡がっているということ、限りがないということです。これは先程言った宇宙です。宇宙には「果て」がないと言いました。また私達が住んでいるここも宇宙だと言いました。つまり、無限に拡がっているこの世界が宇宙であるし、神の世界であるし、仏の世界なのだ、というふうに考えることができると思います。

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

そして、Amitāyus という梵語は「無限の寿命を持つもの＝無量寿」を意味し、Amitābha は「無限の光明を持つもの＝無量光」を意味しています。「無限の寿命と無限の光明」を持っておられる仏様が阿弥陀仏であり、それを信じますというのが「南無阿弥陀仏」ということになります。無限の寿命と光明で私達を照らして守って下さる「阿弥陀仏」様に「感謝」して、「合掌」するということにもなりますが、私なりの言葉に置き換えて考えますと、この宇宙を包み込んでいる絶対の世界（宇宙の力）の存在を「南無します」（信じます）ということになります。私自身は、まだ神様も、仏様も、完全に信じることができないのですが、私たちはこの限りのない大きな宇宙の中で生きていて、そういう宇宙の力によって生かされているというふうに考えることはできますから、それが仏教なのだ、それが仏の教えなのだと言われれば、私も仏教や仏を信じているのかなと思います。

次にその円形の輪も含む丸い六個の輪は、六字の名号（「南無阿弥陀仏」）の広がり（宇宙）を示しています。十二方向に伸びた十二本の金色の棒（光条）は十二光仏を示しています。十二光仏については私はまだよく理解できていません。前後に十二枚

ずつ、計二十四枚の蓮弁もあります。蓮弁は蓮の花びらです。仏教に関する彫刻や絵画では蓮の花にちなんだものが多く見られますが、奈良に行って大仏様をみれば、その台座にも蓮の花びらがついています。これはインドの北部の、お釈迦様が生まれて生きられていた地方に蓮の花が多かったことから来ていると思います。蓮の花は光りに当たってぼうっと静かに開いてきます。この蓮の花がほのかにぼうっと何となく漂うような雰囲気を出すのは、仏教の悟りの境地に似ているのかなと思います。これは私の勝手な解釈です。本当の正確な意味は知りません。

　これらの円形は円満の相を表わしたものとも言われますが、それらの円形を貫いている十二本の線のうち、垂直のものは時間の長さ、水平のものは空間の広がりを示していると言われます。これは宇宙が時間と空間によって成り立っていることを示しています。では時間とは何ですか。時間について考えたことがありますか。私たちは、真夜中の零時から次の日の真夜中の零時までの二十四時間を一時間ごとに刻んで、またその一時間を六〇分、一分を六〇秒と次々に刻んで、時計にしています。でもそういう時間はどうしてできるのですか。時間はどうして存在しているのですか、という

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

ことを考えたことがありますか。これは地球が動いているからです。地球が廻っているからです。あるいは地球が太陽の周りを廻っているからです。太陽自身も動いているからです。この宇宙の全ての星が動いているからです。動いているように見えないだけです。今は科学が発達しましたから、地球も廻っている、太陽の周りを廻っている、月も地球の廻りを廻っていると考えることができます。実際に太陽は東からのぼって西に沈んでいくのが分かります。あれは地球が自転しているからですが、太陽が動いていると考えてもいいです。このように宇宙にあるものは全て動いています。動いているから時間があるのです。宇宙のものが全部止まった状態を考えて御覧なさい。そこには時間がないはずです。何かが動く間に、ここからそこまである距離を動く間に時間が経つのです。時間は宇宙のものが流れているから生じるのです。それは天体が動くだけではなくて、私達を作っている原子とか分子とかの細胞の中にあるものも動いているし、私たちがじっとしていても私たちの体の中では血が流れていますし、内蔵も動いて働いています。このように時間があるのは宇宙のすべての物が動いているからです。むかしギリシャの哲学者が「万物は流転する」と言いました。これは真

理を言い表している名句だと思いますが、宇宙にあるもの、この世にある物すべてが動いているから、時間があるのです。宇宙の動きが止まったら、時間はなくなります。先程申しました「絶対の世界」には時間がないのではないかと思います。でも、私たちは「相対の世界」に住んでいますから、どんなに頑張って人間を長生きさせてみても、あるいは人類をずうっと進化させていっても、「絶対者」にはなれないのです。でも、限りなくそこへ近づこうとしてあらゆる生命、あらゆる生物は頑張って生きてきたということですし、これからも生き続けるであろうし、また生き続けなければならないのではないかと思います。

もう一つの「空間」については先程宇宙の拡がりについてお話しましたから、それに結びつけて考えてみて下さい。この宇宙空間は実に広い拡がりをもって我々を包み込んでいます。私たちはこの広い宇宙空間の中で生かされています。この目に見えない私たちを包み込んでいるものが神様であり、仏様であると考えることはできます。宗教とか仏教とかは、私たちが生きるということにつながったものではないかと思いますが、もう時間が少なくなってきましたから次の四番目の話題に移ります。

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

四　真実心＝校訓

「真実心」というのはこの学園の「校訓」とされているものです。これについては、大学の入学式の「式辞」の中で、私なりに大学の本質に引きつけて勝手に解釈し、「真実心」は「真実の心」であるから、一つには「誠の心」を意味し、性格形成とか人格形成とかの関係では「誠実に生きよう」ということであると述べ、また二つには「真理・真実を求める心」を意味し、「真理探究を目指して研究をどんどん進めよう」ということであると話しました。そのように解釈することによって大学の真の姿に合わせることができると考えたからです。

しかし、もともとこの言葉は親鸞聖人の言われた言葉です。親鸞聖人は「真宗」の「宗祖」、真宗を始められた人ですが、その親鸞聖人の著『浄土文類聚鈔』の中に「この心はこれ、如来の清浄広大の至心なり、これを真実心と名づく」とあり、本来は真実を信じる「信仰心」のことです。「如来」というのは、釈迦如来とか、薬師如

来とか、と言われるように仏様の一つの姿です。そのほか「菩薩」とか「天」とか「王」とかがあります。如来というのは一番上におられる仏様です。仏様の方からこちらに来られるようだというのが漢字の意味だと思うのですが、仏様は私達を救って下さる、私たちを包み込んでおられると考えると、この宇宙に、絶対の世界に拡がっている仏様の清浄な心が真実の心（真実心）だと親鸞聖人は言われているのではないかと思います。そういうことからこの言葉を校訓にしているのだという説明が『光華女子学園五十年史』の中に書かれています。大学の図書館に行けば、そういう本がありますからまた読んでみて下さい。その中では「凡夫である我々は、このみ仏の心を信受することによってのみ、自らの独善と偏執を破っていくことができ、この真実心に照らされることによってのみ、自らをただし、真実の人間として、その人格を形成し得る。教育は、単に知識、技能を習得させることだけにあるのではなく、人間形成、人格の完成を目指すものであるから、学生・生徒をして、真実の人間としての生き方を求めしめるものでなくてはならない。その意味において、何よりも自己を問い、自己を確立していかなくてはならない。だが、その自己を問うということは、自らの力

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

ではできることではなく、この「真実心」に照らされてのみでき得ると考える……」と書かれています（六～七ページより）。ここで書かれているのは、大学で勉強するのは、科学とか学問だけを勉強するのではなくて、人格や性格を鍛えていくということが必要であり、その時に真実の心とか真実心ということを考えて、本当に真実の人間になるような生き方を身につけて下さいという趣旨だと思います。

「真実心」といっても、いろいろな考え方、捉え方があると思うのですが、入学式でお話したのは、私なりの考え方でした。真実心は信仰につながる親鸞聖人のお言葉だと考えると、信仰につながる心の持ち方が出てくると思います。

五　三帰依文

最後に、「総礼」の時の「三帰依文」について簡単に説明しておきます。

「三帰依文」と言っても分からないですね。今日も最初の「総礼」の時に読みました。総礼の時には三帰依文を読誦することになっているということなので読ませてい

ただきましたが、読んでも私自身よく分からないところがありました。難しい漢字が使ってありますし、意味が取れないところもありましたから、漢字を見ないで聴いていただけの人はなおさら何のことか分からなかったと思います。

プリントでは仏・法・僧の三つの文字を大きくしておきましたが、簡単に言えば、これらの三つに帰依しますということです。皆さんは「ぶっぽうそう」という鳥がいることは知っていますか。愛知県の東の方に豊川稲荷という日本三大稲荷の一つのお稲荷さんがありますが、その北の方に蓬莱山という山があります。その山には大きな杉の木がいっぱい生えているのですが、そこへ行くと「ぶっぽうそう」と聞こえる鳴き方をする鳥がいます。ラジオでもしばしば放送されますから、聴いたことがあるという人がいると思いますが、その声を聴くと「ぶっぽうそう」と言っているように聞こえます。昔はそういう名の鳥がいると考えられていたのですが、ある時そういう鳴き方をしている鳥を見つけて録音した人がいて、それは「ぶっぽうそう」という鳥ではなくて、「このはずく」という鳥だということが分かりました。だから、もう今は、「ぶっぽうそう」と鳴いているのは「このはずく」だということが分かっているので

『真實心』第二十一集平成11年度2000年3月発行（京都光華女子大学）

すが、この鳥の鳴き声に使われている「ぶっぽうそう」というのは、この三帰依文の中に出てくる「仏・法・僧」のことです。

これらの仏・法・僧は、仏教における三つの大きな要素であると思いますが、「仏」というのは「仏様」、つまり「仏陀」（目覚めた人＝釈迦）のことであります。だから、一つは仏様に帰依します、仏様を信じますということです。二つ目の「法」というのは仏教の教えのことです。普通の場合は、法というのは規則とか「きまり」とかを意味しますが、仏教の場合は「教え」のことになります。仏教で教えられていること、通常はお経の中に書かれていることを信じますということです。その後に「深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん」と言っているのは、そういうお経を一生懸命勉強して、智慧をいっぱい身につけますということです。三つ目の「僧」は文字通り「お坊様」のことです。お坊様を信じます、信心しますと言っているのです。ただし、個々の僧のことではなくて、仏の教えを身につけようとしているお坊さんたちの集団（原語はサンガ）のことを意味します。

先程、宇宙は無限に拡がっているとか、宇宙は時間と空間で作られているとかの話

をしましたが、そういう中で、仏法、つまり仏や仏の教えに出遭うのは大変難しいので、最後のところに「無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん」と言って、「この仏教の教えは何千年、何万年かかってもなかなか出遭うことが難しいので、その機会を得た今、如来（仏様）の真の教えを理解させていただきたい」という趣旨のことを強調しています。こうして仏教の行事やお説教（講話）の前にこの「三帰依文」を読んで、先ず仏教の本当の意味を理解する心構えを持たせようとするもののように思われます。

もう時間がなくなりましたので、最後に「喫煙の害」について少しだけつけ加えて（略）、私の講話を終わらせていただきます。

――一九九九・四・二〇――